環境中共存有機物質の影響評価(フミン酸を含む水での試験)

・実環境水中には様々な有機物質が存在し、化学物質は水中の存在形態により影響の発現可能性(bioavailability)が変化することがある。農薬においてもフミン酸によって毒性が緩和されるなどの報告も存在する。そこで、有機物質を含む水における農薬の生物への影響を評価する。

・我が国の主要河川における平均のTOC値は約1.5 mg/Lであるため、このTOCに相当すると考えられるフミン酸濃度およそ5 mg/L付近でフミン酸を含む水を用いた急性毒性試験を行い、毒性の変化（緩和）が起こるか否かを評価する。毒性の変化が起こる場合、変化の程度を考慮して急性影響濃度を補正する。供試生物としては、魚類が高感受性である場合には魚類、ミジンコが高感受性である場合にはミジンコを用いることとする。